

## 二人の主人／神か富（マモン）か

主イエスはマタイ 6:19以下で、キリスト者はこの世の富や財に対してどういう態度で生きるべきであることを教えているが、「目」のたとえに続いて主が語られたたとえは「しもべ」のたとえである。「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（24節）。

ここで「富」と訳されている語の「マモナーズ」はヘブライ語の「アーマン」（信頼する、委任・委託する）から来たもので、もともと人が他人に預けたもの、委託したものを意味したという。それがやがて、人がその心を寄せるもの、全信頼をかけるものとなり、ついには「マモン」と固有名詞化し、人格化されて、「神」と同じように、「人の心を支配するもの」を意味するものとなった。

シリア人は自らの神を「マモナーズ」と呼んで礼拝したというが、物質至上主義に生きる現代人もまた、富や名声、地位や成功を自らの「神々」（マモン）として生きているという点で、昔の人と少しも変わらない。聖書が繰り返すように、人は神によって造られているが故に神なしには存在しえない。それゆえ、神を否定した人間は、信頼の対象を持つことなしには生きられないために、ついに富やその他のこの世のものを神とするに至る。神以外のものに信頼を置くとき、それはその人の「マモン」となり、逆にそれによって支配されるに至る。これが物質至上主義に生きる現代人の姿ではないだろうか。

「あなたの宝のあるところに、そこにあなたの心もある」と主が言われたように、本来、神の賜物であるはずの富またはこの世のものが、私たちがそれを何よりも大切なものとするや否や、逆に私たちが所有する者となり、私たちの生き方や考え方を支配するものとなる。そして神に対して払うべき当然の尊敬と関心、時間と熱心を私たちが奪い、私たちが神から引き離していく力となる。これが「マモン」である。人は、神とマモンとに同時に仕えることはできないのである。

「仕える」と訳されている語は、奴隷がその主人に仕えるときの言葉である。人は至高者なる神の「しもべ」となるか、それともマモンの「奴隷」となるか、そのどちらかを選ばなければならない。人生は、そのどちらかの選択の連続である。二股かけることはできないのである。朽ちゆくこの世のもの（それが何であれ）をマモンとすることなく、すべてのものの真の与え主であり、恵みの源であられる主権者なる神に常に信頼して生きる、これがこの世におけるキリスト者の生き方である。

使徒ヨハネの言葉も心に銘記したいと思う。「世と世にあるものごとを愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父（なる神）の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物も誇り（生活のおどり／新共同訳）は父（なる神）から出たものではなく、世から出たものである。世と世の欲とは過ぎ去る。しかし、神の御旨を行う者は、永遠にながらえる」（第1ヨハネ 2:15～17／口語訳）。